編水滸畫傳

初編 貳

へ21
875
2

875
2

新編水滸畫傳卷之二

東都　曲亭主人編譯

○王教頭私ふ延安府ふ走る

張天師道術をりゝく。民間の疫癘てゝ〳〵禳ひ除き後ハ天下泰平なるゆゑふ異〳〵記物語ふ。か〳〵仁宗皇帝宇宙御めさてふ。四十二年ふゝ〳〵崩御ま〳〵ゝ。太子なきゆゑふ。皇位を濮安懿王ふ讓り御子。太祖皇帝の御孫ふ侍人のひ。こ皇を英宗皇帝と号し奉る。是ハ在位四年ふ〳〵。皇位を太子神宗ふ傳へ。神宗皇帝在位十八年ふ〳〵。皇位を太子哲宗皇帝ふ傳へ。嘉祐二年より天子四代。て二十餘年を経〳〵。四海ゆゑ〳〵。文なりる。此時東京開封の府中汴梁の宣武軍といふ所ふ一人の浪子ありり。姓ハ高氏。名ハ

の二男なりしが。排行を高二といふ。此者あそを郎二郎といふ。祖弱年より家業を做さず。只鎗を刺し棒を使ひ。又ふく毬を蹋く。雙あき高まあり。こゝをもつて都の人徒を口順高二と呼ぶ。高毬と呼びしかち毬の字を。萬利と續くこの姓又高氏あるは。毬の技も高くいふてそろくそ。高二これを娛しきこゝもはえ毬の字の毛偏を人偏も書更やぐりて高俅と名告り。此人武藝相撲をよくし。又糸竹の伎を嗜こ。又詩を賦し文を作るふと以ぶも。萬能の團くるも。一云の正きも志ぐ。かく諸藝も達しあぐ。忠義の道もち却く疎く。常も東京の裏を徘徊し。幕間をなくし生活せしも。近曾生鐵王員外といふ人の子どもをそのし。毎日も花街に誘引く。許多の錢をつかせし。徒も王員外ふく高俅ばかく。一封の訴状を認く。宦府へ訴へ出れば。府尹聽く高俅を捉すせ。杖の數四十代答せく。東京を追放せり。是よりく高俅。都のうちも足を容ぐこと能はず。淮西の臨淮州といふ邊鄙もゆき。柳世權といふものをこの人も此柳世權は。身の脩まるのぬをのこもく。もはく無頼悪徒のくを養おき。その房金銭取活業とする者ぶ。徒をも輒くうけ引く留おきし。徒も高俅とこもある。こゝに年も及びしこの。今上哲宗皇帝。五穀豊熟四海安寧の時。この南郊の祀を行はしまるもこの年風雨もくとのひしくば。主上御感のあまり。天下も大赦を行ふ。追放の罪人おを召人さくもふりく。高俅もこのゝび赦免を得く。只顧東京へ歸くまほしく思ふ。柳世權もこのゝを相語ふ。柳世權も徒ご大赦もあふくを喜び。幸東京金梁橋下なる生藥舗も。董將士といふものゝ親戚なるば。はるばる甚遠へ落つきもふぶしく。紹介のも書一封を書写。此の人事盤纏ぶ。ゝ。高俅

高依
赦
されて
東京へ
くる

を費やして東京へ入れ給せたり。さる程に高俅へ柳世權が門を告て京を望まんとすれども、日を経て金梁橋下なる董將士の藥店に素ゆきこ紹介の手書をさし出れば。董將士讀て。こゝろの中にかりて此高俅が音ずれなる破落戸なるを。今赦免せ給ふ上は。つゞ家の上にめ置べ。彼らなれども。ものゝ教へ。されば。柳世權の紹介出さるゝ人を追ひ出んも景護し。すべ權門も況て。その後外へ出さるゝと涙念し。よくて素まひつゝ。婦ふたへして客房に伴ひ。篤く歎待して五七日留おき。一日董將士が高俅を招きいつゝ。つゞ家は高くなる上は。ものゝ家に居まゝ。出身の便もあらば。よりくれ対を小蘇學士といふ人の許へ。この人元素まゝ。權門の縉紳へ出入きゝ。出身の便もなんいよ

由人となるべ。この手書をもて行人といひつ。豫く寫おきくさる一封を。うり出て示せしに。高俅歎びこれを受とり。この日小蘇學士の家に到れば。彼學士も。董將士の手書をよくよつゝ。高俅を原幕間を示せ。浮浪の貧なるを。なでうとの家に表へ。志の孔しも。れ年素董將士と親しく。交を推辭も人情に事なるの系。駙馬（天子の婿を駙馬といふ）王晉卿の府へ。日来まゐりて。その光景を見るに彼家風流の人物。藝能闌なるものを。絲さゝ時めき榮へ世の人小王都尉なるを。移るまでて。今高俅を薦て。彼に進ゝセなるべ。うあゝ歎びのあるべ交あゝ。と肚の裏に了簡。次の日一箇の幹人に書呈をもて。その人とも高俅を。王都尉の許へ送り遣し。るこの王都尉は今上哲宗皇帝の御妹夫にて。神宗皇帝の駙馬

ありしが。その身の富貴に倦て風流の人となりて。不用なる者をも厭ふことなく。おほく養ひおきけるが。目今小蘇学士の人を遣し書を贈り。高俅を薦によりて。ふかく辞び。せんかたなく回書を学士の使にわたしも。すなはち高俅を留おきて。側ちかく召つかひしに高俅は元来幇間の事には(に)あり。只管諂諛て。ひたすらその意に稱ひ。よろづ同家人これが如く思ひて宥よるさるあひだ。いまだいくばくも経ずして。王都尉誕生日の慶ありとて都尉の小舅端王を請待して。この端王と号は先帝神宗皇帝第十一の皇子にて見に今上の御弟にてましませば。人は排行をいひて九大王と称奉り。そころ怜悧おはしまして。よろづ風流を好ませ給ひ。下賤の事に至りても能く優幇間のわざまでも。おろそかならずといふことなく。又これを愛し玉はざるはなし。加旗。琴。棋。書。画。儒。釋の教はさらなり。吹弾

歌舞の伎に至るまで悉く做ひ得て。就中氣毬を好みたまひしぞ。かくて王都尉東道して。香は宝鴨に焚。花は金瓶に挿。水晶の壺琥珀の盃には瑶池の玉液紫府の瓊漿を満泛。玳瑁の盤玻璨の碗には仙桃異果熊掌駝蹄を堆供。鱗をたる膾銀絲を切細くきる。茶は玉蕊を烹て。紅裙の舞女は盡象板鸞簫を随着。翠袖の歌姫は簇て龍笙。鳳管を捧定。準備已にととのひければ。端王来臨ありければ王都尉これを厚く待し心を竭して款待し進して酒宴もやうやく酣なりて。端王浄手にたちまひしくさ。書院の飾着を見給ふに書案の上に羊脂玉もて作りて細工いと妙に作なしたる。獅子の鎮紙ありけり。端王この鎮紙を手にとりて。とみかうみ只管ほしげにおもひ給ふを王都尉すばやく猜して稟すらく。この外に亦は龍の筆架あり。

これも一段近人の刻しものゆゑなるべし。今く義おきく。月今夕頭ゆゑ
ぜ。明日それをもとり拵く獻ぜべ。と結えまわ〳〵まゐ。端王喜びけり
く。舊の席ゆゑ。饗應さ侍ぐ。無ければ。その夕べ宮中ゆ入り
まひ〳〵べ次の日王都尉ハ彼龍の筆架をとり出し。柵子の鎮紙ともゆ
小金の盒子ゆ盛く黄羅包袱ゆ裹一封の書呈をゑ写く。高俅を
使ゑ。〳〵を端王の宮中へ献ゑ。高俅旨を羨く彼処ゆまわり。把門
宦吏ゆ王都尉の使者なるを告院公ゆ如此〳〵の口上を演說さゑ
ば。院公ゆく。端王ハ今庭心裏ゆ〳〵。小黄門と毬を蹴ー居ゆ
ゆ足下直ゆ庭門ゆまわり。使の趣をヤ上ゆへし。誘こゆ入て安ホ内
すゆ高俅ハその後ゆ従ひく。庭門ゆ到る折〳〵。端王ハ軟紗の唐巾
を戴き。紫縫龍袍を穿ゆひく。文武の雙穗ある絲を繫嵌金

線の飛鳳靴を穿四五人の小黄門と毬を蹴るを出ハ高俅ゆ
人の後面ゆつゆ〳〵。毬の果〳〵を待〳〵ゆ高俅ゆ當ゆ發端べき時ゆ
到来ゆ来ゆ〳〵。端王の蹴るひ〳〵毬勢く。彼ゆつゆ居ー頭の上
ゆ内〳〵飛〳〵落〳〵ゆ。毬ゆ名ある高俅ゆなどハ少しも擬議せべき。
一時ゆ騰量ゆ鴛鴦拐ゆ〳〵ゆ。滑ゆ〳〵し件の毬を端王へ
蹴戻ーゆ〳〵ゆ。端王大ゆよろこびつ。そゆめ〳〵高俅を見て示
ハ〳〵。汝ハ何人ぞと問ゆ〳〵ゆ高俅頭を地上ゆ附てハ王都尉の
使ゆ〳〵。王の鎮紙と筆架〳〵を齎来る。高俅〳〵すりのなり。都者
尉の書呈ゆ〳〵ゆあり〳〵禀〳〵つ。そなる〳〵彼書簡を獻ゆ。端王ゆ
ふ〳〵〳〵ふ〳〵〳〵ゆ。王の玩器ゆ黄門ゆ命せ〳〵ゆ。ゆ収させて
高俅ゆ宜ゆ。汝ハ世ゆ稀ある毬の高手なり。只今この場ゆ毬ハ

高俅不喜丸
端王の
毬を
蹋えも

かなはず命を再三固辞まうせども。その許しあらざりしかバいと
も畏しくてやうやく毬場に参加り。年来の本事この時にありと思ひ
しかバ。秘術を竭して王のこころに稱ふやうにしけれバ。毬ハ只鰾膠をもてつけたるやうに
粘るが如く異ならず。高く揚り低く飛ぶとも。よく法に合ひしかバ。端王いたく賞
ありて。直に宮中に留めおかれ。ふたたび王都尉の府に帰したまはず。王都尉ハ高
俅が帰り来ざるを。ふかく奇しとおもふ処に。次の日端王人をもて王都尉を招き
ひ。彼の玉の玩器を恵まれしのみならず。さらに言の序に宣ふやう
使に来りし高俅ハ蹴る毬の高手なりけれバ。吾この人を得まく欲すれバ
さし向へはいかにと宣へバ。王都尉答て。殿下この人を要したまふならバ
なほ彼が便僚なり。長く留めおかれよ。下官も願ハしくぞんじ候と稟ければ端王
以て歓びて御宴を催し都尉を饗應して。王都尉ハ喜びて面目

を施し。是が為に乃く帰りける。是よりして高俅ハ束の間も端王の左側を去らず。
言を巧に事を厚くして給事まつりけれバ端王いよいよ愛しおぼしぬ。あき
人をもておぼせしに。いまだ両月をも経ざるに哲宗皇帝崩御ましまして御子な
きおはしまして文武の百官端王を冊き立て皇位に即せ奉る。徽宗
皇帝と号し奉る。これ玉清教主微妙道君皇帝の御事也。この君世に出させ
めしてより後天下すでに泰平なり。○一日主上高俅を召して宣ふやう朕汝を重く
用んとおもへども。辺功あらざれバいまだ陞遷がたし。よりて豫め枢密院に内
勅して汝が名を随駕の中に書加させおきつ。重ねて出身の日を待べし。と
その内旨をかうむりし後に。高俅拝伏して恩恵を謝したてまつりて回避せず
臣しか。主上ことさら彼を寵愛の余り。いまだ半月も経ざる間に殿帥府の太尉
に任じたまへり。されバ高俅ハ一時に大臣の員に列されこれより高殿帥亦高太尉と

禄を受。吉日をえらみて殿帥の府に到りつゝ見しかバ太尉の屬官衆居多群集り。おのおの手本を呈して高俅花帖を一々點検するに。その内只一人。八十万禁軍の教頭王進といふものみ来らず。この人ハ前頃病にかゝりて衙門を引籠り。その事を前の殿帥太尉にまうしてあり。家にありて保養せるが。妻ハなくて母ばかり一人おはせる。しかるに高俅ハ當日王進が来ざるをきゝて大に怒り。渠奴病に托られを侮ると思ほし。いそぎ召取来れと焦燥にぞ。今日牌頭の小吏。王進が家に走りゆきて。如此との故を告しかバ。王進ハ是非なくも已ことを得ず病を推おし。忙しく朝服を被りて。その人ともに殿帥府に参り。身を躬め腰を折礼儀を厚して参見するに。高俅眼を瞋して。いふやう汝ハ都軍教頭王昇が児子なるに。汝が父ハ原市上にて棒を使ひ薬を賣て生活とし。何の武藝をなききぞのなりし。前の殿帥眼明らかならず。汝をとり挙て教頭とせり。去

かゝる汝の徒を志らんや。誰が勢要を托てこれを侮るぞと詈しかバ。王進畏みて稟まうしけるハ。それがしいかでか太尉を侮奉らんや。實に病いまだ痊ざるによつてなりといふに高俅いよいよ怒を發し。汝が言葉胡説なりけり。實に病ならバいかにしてハこゝへハ来つるぞと責問に王進又答かねたれバ。左右の召せと命じて固辞ども推て拿りひしぐといへども果ざるに高俅声をあげ。この愚者甚無禮なりとて牽出し笞でうたしめんといひ懲せバ。都牙將等ハ王進と睦しきをもて。軍正司ともにこれを覚りてやう太尉新に職につきたまひし慶をもて折なるに人を罪せんハ宜からず。しばらく彼を恕し給へといひてさはゞしく諫ければ。高俅もやゝ面を柔げ。衆官の言葉黙止がたけれバ。今日ハまづ恕し。明日にあらずして理會せんとの旨をつたへいひて王進をゆるして頭を擡太尉の面

高俅怒て王進を罵る

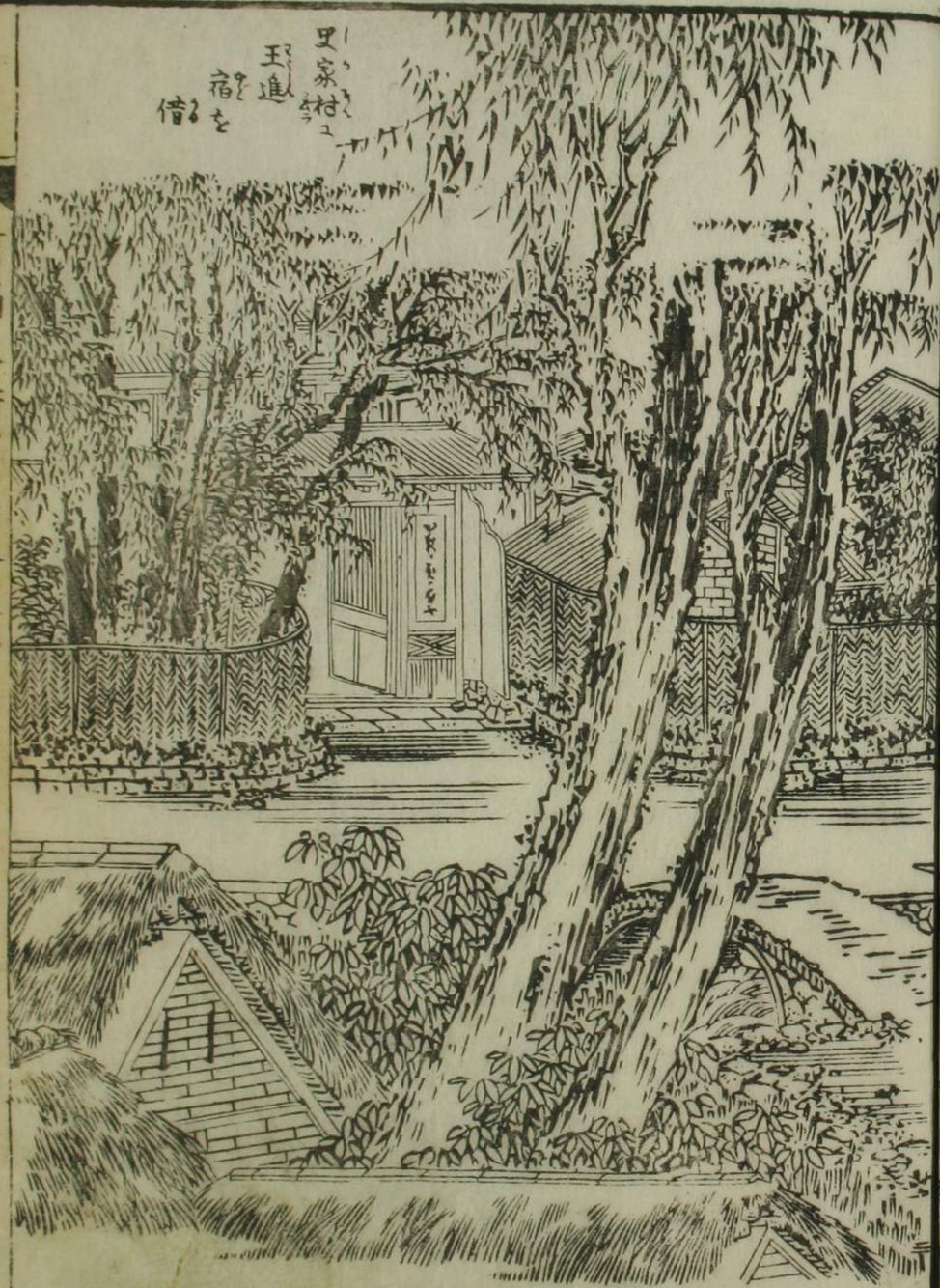
を恐くこゝろ。年来見おぼえある高俅あるべし。うち驚きて牙門を退き。こゝろの中おもへらく。こゝの性命このたびは保がたしと。彼高太尉といへは。いのちなるべくおもひ。東京の幫間高二ゆくありけるなり。この前年棒を使ふこゝを学ひ。こゝのいへいとゝ打翻ら是四五箇月起こるゆへいかりし。そのゆへ彼今幾師ゆく。殿帥府の太尉ゆなるゆへ。勢要ゆ[illegible]く。舊怨を報んとて。彼屬官あれば。とても爭ひ凌こゝあるべし。こゝいのゆへと。只管ゆ愁ひ悶ゆ。ゆゑ家ゆ立こゝろ。母ゆ志ゆ[illegible]の物ゆ[illegible]るゆゑ。母も縁由を問こゝ深くこゝろ歎き。母子言葉もなくて。涙さしぐむこゝ。且くこゝ母のいへ。世の常言ゆ。三十六の計も走るを第一とせこゝいへれば。さ一當こゝ立退こゝもあるまじこゝいへゆ王進沈吟こゝ。母の命いと理ゆおぼえいこゝゆ延安府といふ処なる。老種経略相公（老の字を加へくれをロ[illegible]）へ遣庭を求こゝ。此方の圉司城代ゆ似たり）の軍官京師へ到る。母ゆそしりゆ貧子となりこゝ。捧鎗ゆ学ひ。この急難を服是いろんこゝ私語ゆ。母もとゆ従ひこゝ。遁出べき謀を定めおきこゝ。王進その夜きり。二人の牌軍。張牌李牌を呼こゝいへこゝ。これこの程病痊こゝ酬恩ゆ酸東こゝ門の外ゆ。嶽廟へ参詣ゆ。夜のうちより彼処ゆ赴ゆ。廟祝ゆこの事を告こゝ。ゆゑ扉門を開こゝ。祀の牲ゆ[illegible]こゝ。こゝ祈るを待ちいへこゝ。ゆゑ主明ゆ参詣ゆ[illegible]こゝ。二人ゆ張牌李牌こゝを得こゝ。寅刻ゆ家を立出こゝ。極ゆ王進ゆ歎き涙こゝ。今ゆこゝ安こゝよろこび。貯禄ゆ銀を懐ゆ挾衣服ゆ[illegible]打挾こゝ。さて後槽ゆ馬を牽出こゝ。行李を拴縛こゝ。母をその上ゆ[illegible]こゝ。繋を取

牌ゆ官府へ出ゆ者ゆ[illegible]こゝ。ゆゑ張牌李牌ゆ[illegible]

く。いまだ夜も明けあんずるに西華門を走り出て延安府を投げて旅ぞ
るきて又従二人の牌軍ハ四めぐりを走るぞ。廟のほとりにひかく。
りもとの王進をまつに日ハ高く昇りぬ。その人影もせずあたりに行
るぶ。張牌やぐく走り出てその家の光景をみるに門ハ空く鎖しく
裏ハ人音もなし。こハあやしく疑ひ惑ひまく舊の廟に走りゆきく。
李牌ハもとのことを告げたるに二人ともに従此を索ねめぐるに王進も
その母もいづちゆきぬ。絶く志るこのもなく。その爲体逃亡せしとおぼ
ゆるぞ。その日の夕べに李牌張牌殿帥府に参りて緑由を訴ゆ。
高俅ゆく大に怒り。俄頃に文書を諸方へ押下し。ひたすら王進を探ん
とす。さる程に王進母子ハその曉東京の地を離れ野を過山を越路を往
くこと十日ばかりに一日の黄昏に宿頭を行きぬ。ゆゆしく客

店あるに見る村を過ぎぬ。林の中に燈の光幾つとなく閃りしかば王進ちら
く立よりて熟視るに。この家孫さんの大莊院なり。四方の土牆の裏にて
柳二三百株を栽なるに門をさして呼門ハ一人の莊客出
出て。こハ来る故を問に王進答へく。そはかの老たる母を携へる旅客
なるぞ。あまりに路をいそぎて宿頭をゆきあぐるに暮に及べく迷惑して貴宅を
乞うけく来りしこのこ。あるに一夜の庇を垂るべしと礼義を篤く懇
懃にこのこと申に莊客走り入て莊主太公にかくと告るに莊主云ハく
情あるものなれば輒くうけ引王進母子をよび入れさせり。王進ハ宿を貸人
にあるに中にてこそ安堵く。母を馬より扶おろし馬をバ柳の樹に繋とめて従莊
客に従て裡に入て打麥場の上に擔児をさしおきて。あるに伴ひて草堂に
至り莊主太公に對面せり。この太公ハ年紀六十を超えたるに鬚

里家村ニ
王進
宿を
借る



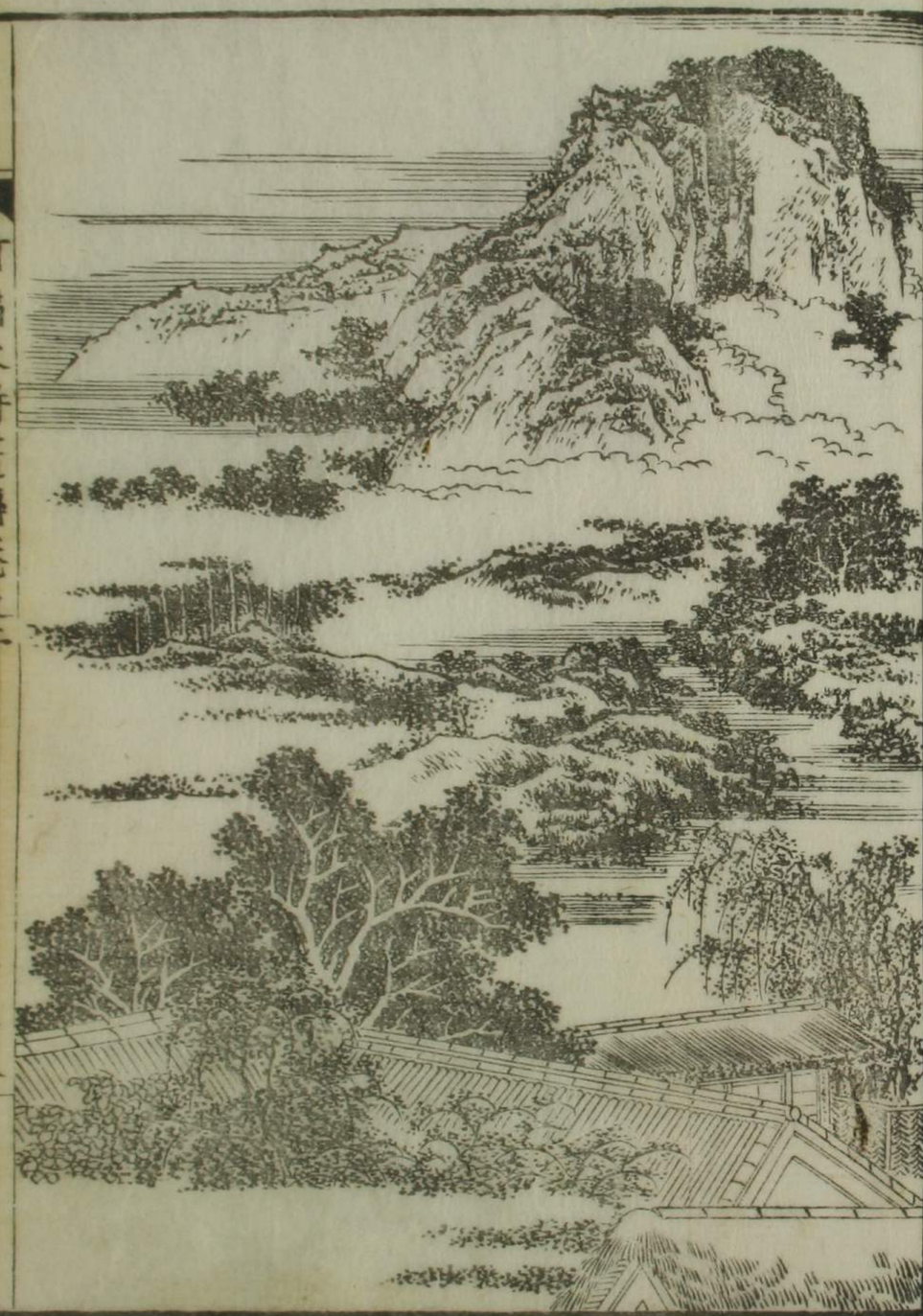
髪白く。頭に塵の煖帽を戴き。身に直縫の寛衣を穿て。腰に皁絲の縧を繫。足に熟皮の靴を穿ぬ。王進ちゝ〳〵居ゐ〳〵。禮義を舒べ。左公も又礼をく〳〵。客人ゆゑゆゑ少〻路をゆく〳〵人。霜露にそぼめきて。いく〳〵の辛苦あゝん〳〵。母子ハいづくのくに。いづ地へ到るゆゑ。問に王進答へ。我ハ姓ハ張氏にして。元京師の商人なるが。身の幸なく〳〵本錢を消折いたしもせんすべなく。延安府なる親券を托〳〵赴くにこゝに志ある。今日路を貪り宿頭をもとめすぎ〳〵。かゝ庇みなのびうけ。彦金ハ例にまさるせく。いの徒なりとも拜納ゆゑ〳〵ハ公なく。こゝにふるハ公ばゆゑ志ゆゑ。さて空腹にあるべし。夕食を進らもんとて。莊客に命じ飯を供酒を溫さセ。厚く母子を款待し。又王進が牽来し馬にも秣を食セ〳〵後槽に引入れさせ。こゝに旅路の憂を問慰なるどゝ。食事も既に果しゝ。又莊客に案内させ〳〵客房に誘セ。草煙に設おき〳〵。ゆるやかに散せ。王進母子ハ庇のあさらぬを歎び。ゆえ。梳引ゆゑ〳〵。さて次の日に到る。夜も既に明ゆゑ〳〵。王進母子ハいまゝ起き。左公こゝに客房の前に来り〳〵。窺ふ裡に人の声喧音まれば。こゝろ怪しつゝ。夜も明るに客人ゆゑ起ぬ。ゆゑ〳〵。紫肉ハ王進ハ〳〵。恙〳〵出記る事ハ。こゝの母此ハ毎日に馬に乘て路を走し。病にや。心痛の病発り〳〵。夜ごと〳〵。惱こゝ。抱いて居ゆゑ〳〵。左公驚る。さて。声喧ゆゑ母に問〳〵。おゆゑ〳〵。病ハ人さゝ〳〵。知ばゝ〳〵。おばゝ〳〵。只いろ〳〵。遠間ありゝ。ゆゑ〳〵。保養あるゝ。幸ゝ。家に心痛を治る妙薬あり。まづこれを進らせ〳〵。試こゝ人と。いゝ。彼薬を左へいと。信〳〵。ゝ勸るに。母子ハ半もく感悅。こゝに五七日足を〳〵ぶ〳〵。養生せ〳〵。母の病ゆ〳〵。ゝとゝ。ゝ是ハ聖に出たゝん〳〵。王

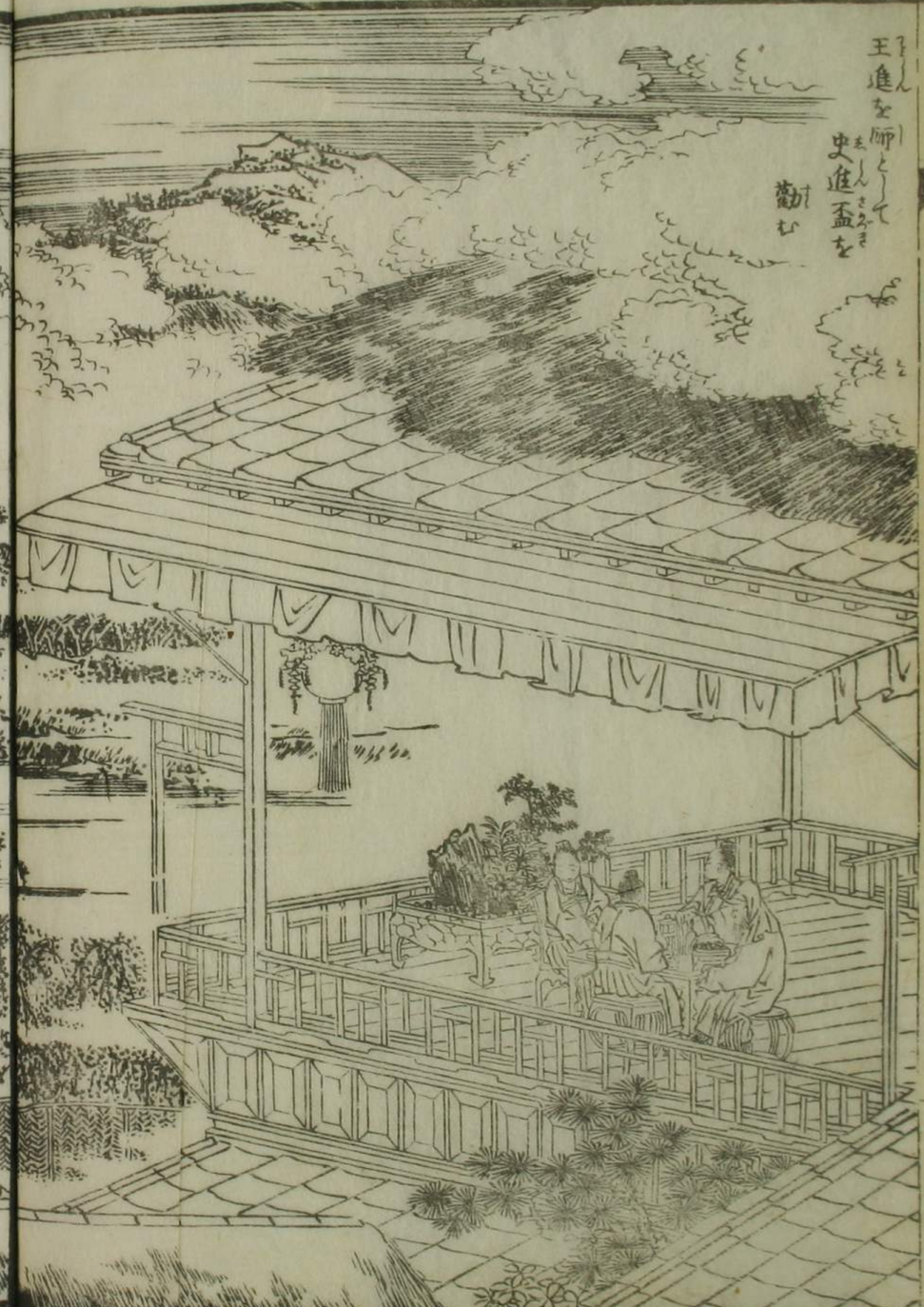
進ハ後槽ヨリ到ル。この馬をこんな時空地の上ヨリ一人の後生ハ肌脱ぎ棒を使ひ居ル。この白くふくふくの肥ある肢體ヨリ青く龍を刺して。年紀ハ十八九ヨリ。ぐんぐんと王進彼の棒を使ふをこんぐんむりつぎて声を発して。この棒使ふてとハよくつゝべども。おほ破綻ありくこの用ヨリちぐしと識して後生ハ少つゝそ大ヨリ怒り。これ是ぐんぐん。七八人の師父ヨリ従ひ武藝の奥妙を究ルヨリ汝何この為ヨリ嘲哢ぞ。その顧ヨリ走ぐんこれ。走りくらんとする折も。荘主の左公走り来ル。やあ〳〵客人ヨリ礼ヨリ。客人ハよく棒を使ひ来ルとおぼ。彼ハこの児子ヨリ〳〵ある。藝術足ぐふところもあるべ。教へ来ルへといつ。又後生ヨリ對ル。汝ヨリ客人ヨリ點撥を受ふといふヨリ後生いあ〳〵憤り。この父彼ごらふを真ぐふあるひそ。我まづ彼と較量ぐり。贏ぐバ第子ヨリあるべ。さもあくバえそ命ヨリハ従ふまじるといひ〳〵。更ヨリけ〳〵氣笑なる是ど。王進ハ只うち笑ぐ。彼と無んくもせず。左公との光景をぐ。ぐれバ児子と較量ぐ。ぐ打仕ヨリ縦打ごろさぐとも自業自得ぐれバ。聊も恨ヨリ。といひ〳〵再ビ左ホ〳〵ヨリ王進も今ハ黙止ぐ〳〵。礼ハ許ぐ〳〵ひつ。鎗架の上なる。ヨリこの棒をぐ〳〵取。ぐ〳〵と立むかひ。まづ旗鼓といふヨリを使ひ棒を電のごとく閃ぐ〳〵ぐれバ。後生ハ會釋もなく。只一打と逆来ハを王進ぐ〳〵棒を抱二歩三歩後退ぐ。後生ハ得ぐ〳〵つけ入り踏こ〳〵打んとするを。王進ぐやく身を回ル。空を空ぐ撲地と打バ。後生下と受ぐむ。王進この〳〵記。彼を打バ〳〵べ〳〵しごの痕のつゝぬ〳〵ぐ〳〵軟ヨリ贏をぐ〳〵思ひ。又その棒を引ぐ〳〵。腋の下へ閃と突入ヨリ一繳ぐ〳〵ぐえつハこの後生ハ持ぐる棒を遥あぐ〳〵繳ぐ〳〵。後方ヨリ撞と倒ヨリ〳〵王進忙し

九紋龍
莊院
王進と較量
新編水滸畫傳卷之二
十五

く棒を投撒て。後生を扶起し定て痛やおはしつらん。恕し給へと挨拶すれバ。後生牙を起して首を低。それがし眼ありながら真の豪傑を知らずして。こゝになき過言に及しぞ面目なけれ。恩人ハ是まで学びし武藝ハ皆徒事になりたるも口惜がりてハ無礼の罪を恕し給ひ。點撥托ミ候と餘義なくも望まれバ。王進莞尓としていなみがたく。母子此ほど宿りて厚き疵を蒙ひ。せめてハ其子に棒の一手も教まゐらせ聊恩を報ぜんと。いともねんごろに回答するにぞ。太公大に歓びて。俄頃に酒宴を設王進母子を賓客になして。四人團坐して酒酌かはし。太公王進に對ていふやう。客人の武藝ハ寔に尋常にあらず。定ていかなる教頭にてかおはしけん。答しうかゞハん名告たまへといふに王進答て。今ハ何をか隠しさふらはん。それがし張氏の商人なりと申せしハ虚言にて。実それがしハ東京八十万禁軍の

教頭王進といふものなりしが。はからずも難義に係りて。母子京師を脱走出ぞ。延安府におもむかんと。老种経畧相公のもとに由縁ありて。其処をこゝろざして赴く折しも。母の病著によりて斯の庄を驚し。母も程なく快気いたしまして。莫大の高恩忘れがたく。いかでか報じ奉らんと思ふところなりといひて。彼高俅が悪をもなく語りけれバ。太公父子ハいたく感じそれより其の素生をかたりて。且驚き且痛みて。又人にもあらじとおもひつゝ嘆賞してやまず。敬ひ譽めたる間に王進ハいひける。かく人が誇るに似たれど。令郎の今まで学びたる武藝ハ只花やかなるのみにて。戦場の用にハ立がたし。それがし點撥いたさんに。手てハ程なく上達あるべしといふ。太公父子斜ならず歓びけり。且くして太公王進に物語りけるやう。それがしが先祖よりこの華陰縣に住ひして。里正を承當してあらんが前面の山ハ少華山




王進を師として
史進盃を
勸む

華山なり。又この邨ハ史家村とよびて、九三四百軒の竈あり。村中の民悉くこの姓ハ史氏なり。又それぞれ児子をもてこの後生只一人あり。その名を史進と呼ていとけなき稚きより農業を嫌ひ、鎗を刺し棒を使ふのみを好こゝろ人毎にこれを憂ひ、ひそかに前来ゆくすゑをひぬされどそれぞれハ彼が好むまゝ。つゐに制止もせず。又銭財をも惜まず。評多師父をえらぶこと年来武藝を学ばせ。又高くある近人に托こゝ。彼が一身に花繡せ肩臂胸膛のあらゝまべく九條の龍あり。これ有りて満縣の人口頃刻に彼を呼て九紋龍史進といふ。教頭今日既にて来ハ、こゝに立まつ。ばそれぞれ厚く酬ふ。いと叮嚀に托こゝ。ばあれハ王進よろこびて史公に安くおりひあべそれぞれ見得る所の武藝ハ力を竭し尽く点撥いとまべしとうけ引。史進と師弟の契約をなしあはせて退出

毎日彼に十八般の武藝一ゝ頭より指教ゝ。抑十八般の武藝ゝ。

棒。鎗。朴刀。金枝。五雑俎に載る。三叉。四刀。五鎗。六刀。七矛。八斧。九鉞。十小戟。十一鞭。十二鎚。十三槍。十四刀。十五把頭。十六叉。十七綿縄套索。十八白打。上に記せし十八般と大小同ゝ異なり。かゝる光陰やゝ過て。王進母子華陰縣にあるに。年ハ漸に十分に精熟する王進ハ自己を責ゝ。件の奥妙を伝へ今ハ中軍教頭に昇るべくもあらざれハ。王進ふゝ歎ゝ。つゝゝと思ふ。これ一旦史太公父子の情に覊されて。この数月に及びて。この法中ゝ中ゝの恩も報ひつれば近きうちに延安府に赴くべきて。一日太公史進に別を告ぐ。日来の一礼を述べれば史進只管とゞめゝいふやう。こゝ師何ゝて急に旅立んゝと宜ふぞ。聊も仇あゝ記あゝ遣留ありて。おゝくハとてもて生涯をおくり

ゑんそれぐ〜貧しきを救ひ、ものよろこばしめ、養ひ進まべ〜といふ。王進若くこれ母〜もふこてふ〜安く世をおくらんとこゝろざす。さるあれど幸福あり。志のあれどの高俅父子ら〜追捕この家ふ迫る。なくべ出ず父子を連累まべ。足元未てが奔とところふあ〜ぞ。縱いい極留まふ〜もとても留る者ふしあ〜ねば明日袂をならべ〜ゆこも。陝さ〜ふてうゆ〜延安府といふ処ハ土地肥〜人を用るの州ふ其ばふを立る便あきふなく〜ぞ。すぐ〜このまゝ別ふいんといひて。いふ留れ〜ぐも留る等色なられば史進父子ふ〜別を惜み。やぐ〜留りの酒宴成淡。二正の段ふと百両の花銀を餞〜。武藝指教の酬謝〜まで。さて王進ハ次の日擔児を馬ふ拴縛母をその上ふ扶ふく。左公史進ふ辞別〜。遂ふ延安府を望ふく立出けるぞ。

新編水滸畫傳巻之二畢

供の者 供の者

為身ふ

孝子

孝子

酒六人